享楽ぴえん系おしっ娘は、
破滅願望を叶えたい。

―体験版―

にゃこ

心療内科のトイレでばったり出会った春那の上に跨って、対面座位おしっこしたのが記憶に新しい。その後、待合室でペラペラ喋る訳にはいかないからと、アプリを介して会話をしたのだった。

✧　✧　✧

◆春那『うおおおパキってきたあ！』
◇藍莉『それはよかったですね』
◇藍莉『あまりキマってる感じ出さないでください』
◇藍莉『見抜かれてしまうのは避けたいので』

あのとき口移しで飲ませたのは精神賦活剤と言われる薬。覚醒剤に似た効果があり、即効性がある。依存性が問題視されて、今ではほとんどがマイルドで持続して効能があるタイプの薬剤に置き換わっている。

◆春那『わかってるって！』
◇藍莉『どうだか』
◆春那『でも助かったー』
◆春那『あのままトイレで死んだままだったら絶対ＯＤだってバレちゃってた』
◆春那『あ』
◆春那『名前言ってなかったね』
◇藍莉『そうですね、春那さん』
◆春那『何故知ってる！』
◆春那『エスパーか！』
◇藍莉『テンション高過ぎ』
◇藍莉『誰と話してるかって表示されるじゃないですか』
◇藍莉『まあ本名じゃない人もいますけど』
◆春那『こだちはるな。小立、春那』
◆春那『おしっこちゃんも教えて』
◇藍莉『おしっこちゃんって』
◆春那『名は体を表す』
◇藍莉『みんなの前でそう呼んじゃうんです？』
◇藍莉『広野藍莉』
◇藍莉『ひろのあいりです』
◇藍莉『呼び方は自由ですけど一応』
◆春那『あいりちゃんか、悩むな』
◆春那『うーん』
◇藍莉『悩まれている』
◇藍莉『嬉しい』
◆春那『嬉しょんでちゃう？笑』
◇藍莉『おしっこなら』

◇藍莉『今出したばかりだから残念です』
◆春那『今ね太ももから』
◆春那『おしっこの匂いしてるよ』
◆春那『あいりちゃんお尻ぐっしょりだったもんね』

待合室で隣り合わせになって座っている春那も、私と同じくらいの丈のミニスカを穿いていたから、トイレで対面座位になった時に私がお尻を置いていた場所は、彼女の生脚が露出していた。私の出したのが濃いおしっこだったからだろうか、春那と私の体温で温められた尿が匂いを伴って、あたりに漂っているのが分かった。

◆春那『マーキングばっちり』
◇藍莉『言い方』
◇藍莉『そしてかなり恥ずかしいです』
◆春那『まんざらでもなさそう』
◇藍莉『そう見えてしまいますか』
◆春那『そうだよ』
◆春那『わたしは』
◆春那『まんざらでもない』
◆春那『言ったよね？』
◆春那『このまま化石になるのもいいかもって』

その言葉を春那から聞いた時は、ＯＤして曖昧な気持ちで、酩酊感に溺れながら紡がれたものだったと思っていたから、酔っ払いの言葉みたく軽く捉えていたけど、スマホから顔を上げて私を見る春那の瞳は、どこか憂いを含んだような真摯さがあった。薬が彼女をそうさせていたのか、シラフで想うことも同じなのか。

私、こんなに頭がいかれている女なのに。

しばらく言葉に悩んでいると、どんどん通知が届いた。

◆春那『おっと忘れてた』
◆春那『さっきの、見る？』
◆春那『よね！』
◆春那『待って』

唐突に写真が一枚、画面の中に現れた。フラフラと泳いでいた春那の眼と、だらりとして焦点が合っていなかった私の眼が、お互いを見つけた瞬間、それを見事に捉えていた。この一瞬だけは、だらしなくも見えそうな二人の口元が、接する前の準備をしているようにも見えて。お互いの引力がお互いを離さない、二重星のようだと思い、私はしばし見蕩れてしまっていた。熱いコーヒーにシュッと溶け去るグラニュー糖のような、刹那を切り取った一枚。

◆春那『ねえ足りてる？撮れ高』
◆春那『ねえ見てる？』
◇藍莉『見てました』

◇藍莉『ずっとみてた……』
◇藍莉『すごく耽美な感じがいいです』
◇藍莉『実はこれ、おしっこしてるんですよ?』
◆春那『笑』
◆春那『それね！』
◇藍莉『何がとは言いませんがその、』
◇藍莉『使えそう』

ずっと話していたから既読はすぐに付いた。でも、春那からの反応が途絶えてしまった。自然に出てきた言葉だったけど、急に不安という名前の雲に覆われる。あの時、春那がエッチだとかエロいだとか言っていたから、そのままのノリで言ってしまったけど、勇み足だったかも……。

◆春那『えっと』
◆春那『そういう趣味か、やはり』

たっぷり五分くらい経って。
もう ///

◇藍莉『上に跨がっておしっこしちゃう女ですよ』
◇藍莉『だいたいあんな提案されたら』
◇藍莉『普通は目の前で漏らします』
◆春那『まあそうか』
◇藍莉『動画』
◇藍莉『動画待ってるんですけど』
◇藍莉『うまく撮れてなかったとかですか』

見たかった。
跨がって、春那の背中に手を回して抱きついてしたおしっこを見られて、実質キスまでして。今更隠す欲望でもないだろう。見たかった、私のあの時の姿を他人視点で撮ったものを。心情と体感、それに写実というマルチアングルを。感じたかった、未知の滋味の豊かさを。

◆春那『あ、わたしの前の人呼ばれた』
◆春那『そろそろ話せなくなっちゃうから』
◆春那『あとでお茶できないかな』
◆春那『連絡入れていい?』

この後、仕事のシフトが入っているのが恨めしかった。仮病を使って休んでしまいたいとさえ思った。

◇藍莉『仕事あるんですよ……』
◇藍莉『夜職なんです』
◇藍莉『営業かける時間にでも話せますか?』

◆春那『いいよ』
◆春那『待ってる』
◇藍莉『平日だから暇かもですし』
◇藍莉『焦らされた挙げ句、動画乞食になってしまいそう』
◆春那『またあとで～』
◇藍莉『はい』
◇藍莉『薬バレしないでくださいよ』
◆春那『任せて！』
◇藍莉『あ』
◇藍莉『まって』
◇藍莉『やっぱり動画だけ送りつけてください』
◆春那『もう仕方ないな』
◆春那『はい』
◆春那『感想送っといて』
◆春那『後でみる』

しばらく何も反応がなくなって、私は動画を送っている時間に違いないと思い、生唾をごくりと飲み込んだ。時間が引き延ばされ、いつまでも経ってくれない錯覚に陥った。
来る、くる。
唐突に自分が映っている動画のサムネイル画像が表示された。

奥付

享楽ぴえん系あしっ娘は、
破滅願望を叶えたい。
―体験版―

発行：2023 年 7 月 29 日

著：にゃに
Twitter：@nyanpoyoyo2
pixiv ID：63106856
Mail：nyanpoyoyo2@gmail.com